

JSSOGの来た道、往く道

JSSOG・WASOG名誉会員 細田 裕

国際舞台への参入

筆者在学中、皮膚科学筆記試験に「ブツクのサルコイド」がでて、白紙提出の記憶がある。この病気の学会が出来るなどということは誰も想像していなかったろう。1953年には、StockholmのSven Löfgrenがサルコイドーシスの初発病変は胸部にありとする“Primary pulmonary sarcoidosis”を唱えた。世界の疫学像の解明を主題とした1960年のWashingtonのサルコイドーシス国際会議では、野辺地慶三がEpidemiology of Sarcoidosis in Japanと題して1921年以降の97例の解析結果を報告している。BHL72%，皮膚36%で現在の疫学像とは異なっている。これが日本から海外への最初の発信であった。（重松逸造：日サ会誌2003；23：3-9.）

注：筆者がLöfgrenの講義を初めて聴いたのは1960年1月、ローマ大学フォルラニーニ研究所留学中のことだった。その後、北欧、米、独の施設でサルコイドーシスを学んだが、元祖の北欧でもクベイム反応は使用されていなかった。同年秋に帰国したところ、タイムリーにサルコイドーシス臨時疫学調査班（1960年1-12月）が発足していた。班長の岡治道（元東大）、北村包彦（東京医大）、野辺地慶三（ABCC）、重松逸造（国立公衆衛生院）らの門前の小僧となれたのは光栄であった。

クベイム反応— 過信と僥倖

1960年のサルコイドーシス国際会議でのmedical group report（座長H. Israel）はSiltzbachとChaseらの詳細な報告を基に、診断の“acceptability”を4区分した。この中でクベイム陽性（II）群は生検陽性（III）群に比し、よりacceptableであるとした。この区分に対して、“recommendation”に留めるべきとか、欧州での使用経験は皆無などのコメントはあったが、無修正で通過した。今から見ると、この区分はIsraelの大きな勇み足だったと筆者は考えている。当時、斜角筋リンパ節（通称スカバイscalene node biopsy）以外に生検法はなかったから、世界は無批判にクベイム反応に飛びついた。某大学の内科テストに“クベイム反応”が2年連続で出された程であった。

Siltzbach抗原の国内配布はサルコイドーシス研究班が仲介して行なっていた。筆者がニューヨーク

に彼を訪ねる度に、帰りの握手の私の掌中に、Kveim test suspension（正しくは抗原と呼ばない）のアンプルを握らせてくれたのを思い出す。やがて国内の臨床家からもクベイム抗原配布の要請が多く寄せられ、文部省試験研究費クベイム抗原試作研究委員会小嶋理一委員長（1966，67）が発足した。しかし、適切なサ脾は得られず、集めたリンパ節からの試作品の陽性率は低かった（予研片岡哲朗）。クベイム抗原の決定的な欠陥は製品の力価を使用前に測定出来なかったことと筆者は考えている。全国疫学調査事務局としての活動のほかに、サルコイドーシスのクベイム抗原配布元としてのサルコイドーシス事務局の存在が医家の間に知られるようになった。これを通じて、事務局と医家との交流が増し、共同研究の機運が芽生えてきた。このような交流もクベイム反応過熱がもたらした僥倖とも感じられる。英国、豪州、スイス製抗原なども永続性は無く、自然消滅した。

厚生省特定疾患サ研究班の研究体制

1960年以来の諸研究班を経て、1972年には厚生省特定疾患対策室（室長仲野英一）が設置され8疾患の大型調査研究班ができた。筆者も重松逸造に連れられて厚生省へサルコイドーシスの説明に出かけた記憶がある。「訳のわからないカタカナ病名だから難病に指定されたのだ」と言う冗談が残っているほど、サルコイドーシスの知名度は低かった。これら疾病を横断的に連ねる特定疾患疫学調査研究協議会が重松逸造、山本俊一を世話人として発足した（難病の最新情報：大野良之ら編：南山堂、2000）。サルコイドーシス調査研究班は本間日臣、三上理一郎が長らく班長を務めた。サルコイドーシスは新しい病気だけに病態不明だったし、少壮者も大家も同じスタートラインから研究を開始した。従来の研究費配布方式は班員に等しく分配し、僅かの中央費予算を計上することになっていた。しかし、新しいサ研究班では大部分を中央費に当て、夏休みには公共宿泊施設を利用した宿泊ワークショップ、年度末には研究総会を開

催するなど、研究の成果は著しいものがあった（自画自賛！）。地方の若手研究協力者も隔てなく自薦他薦で参加できた。ワークショップでは深夜まで、X線病型を論じたり、新しいプロジェクトを考えたり、実に自由な雰囲気勉強が出来た。上野の東京文化会館で開かれた第6回国際サルコイドーシス学会（1972年）も研究者達の協力で成功裏に終わり、学者同志の絆を強くする機会となった。このユニークな研究費配布法は厚生省の了解を得ていたものの、年度末の会計報告作成は難事業で事務局（小高稔）が頭を痛めたていた。サルコイドーシス研究協議会から発足した研究会は学会へと自然に拡大した。特定疾患の組織があつてこそ、わが国の高いサ学レベルが醸し出されたと、強く思っている。

JSSOGの往く道

今私の手元にある1958年第1回Londonサルコイドーシス国際会議以来のProceedingsを読み返すと、わが国の初参入以来わが国の研究は量的にも質的にも優れていると思われる。日本なしでは、学界は寂しいものになったことだろう。WASOGはMilanoのRizzatoが独力で立ち上げた学会であるが、日本と地元イタリーを除くと会員数は多くない。次号のブルーの学会誌Sarcoidosis Vasculitis and Diffuse Lung Diseasesは校正も済み、印刷寸前だが、財政的理由で出版が滞っている。スコアも高いこの学会誌の存続についてよい知らせを待っているところである。再開の暁には、JSSOG会員はWASOGのJournal（英文）を自分の学会誌として研究を投稿して欲しい。DNAという言葉が初めて世に現われた頃 恩師岡治道は「当分細分化が進むだろうが、逆方向の統合の時代がやがてくる」と言っていた。わが国でも優れた細分化研究が行われているが、各分野で得た豊富な研究を統合する時代が到来するだろう。国内外で初代のサルコイドーシス学者は現役を退き、2代目、3代目の諸氏が活躍を続けている。JSSOGが国際研究のリーダーとして、更なる活動を続けることを望んでやまない。